

* * *

冒険者アレスは、身の丈以上もある魔竜の腹を一文字に切り裂くと、剣を鞘へ戻した。

最適化された動作と共に、微かな金属音が鳴った刹那。
冬の街を長年苦しめてきた魔物は、切り込まれた一閃から上下に別れ、後ろから倒れこむ。
洞窟の壁に張り付くように縮こまり、飾り同然であった冬の街の男たちは、松明を掲げながら、自分たちの問題が瞬きの間に片付いたことに、竜が討伐された以上の時間を要した。
それまで畑を荒らし、住人を貪ってきた悪しき竜が、今は二分の一に胴体が別れ、その身に詰まっていた血液が、乾いた地面に染み込んでいく。どよめき、戸惑い、……間を置いてからの、野太い歓声。

古い油の炎より明るくなった男たちを背に、
この場の英雄である黒髪のアレスは、丁寧に整備された武装に押し込めた肉体の神経を、数多の戦場を写したダークレットの瞳でなお、警戒を緩めることは無い。街を救い、大型の竜を討伐した直後でも、喜ぶこともなく、雄たけびを上げることもない。その身体は生存のための対策を怠ることは無かった。
祠のように狭い洞窟は、群れから離れ、孤独に老いた竜の、終のねぐらだったのだろう。
飢えた気配は鳴りやんだというように、警戒をやや解いたアレスは年季で破れたマントを翻し、興奮冷めやらぬ住人たちをすり抜けながら、一人の住人へ静かに声をかけた。

「竜は稀少種だった。長く生きていて魔力をよくため込んでいたし、血も肉も骨も、余すところなく全てが貴重な素材として高く売れるはずだ。住人全員に新品のコートを一着与えても余るほど、一つの冬程度は越せる金になるだろう」

かくして、人間の血を流すことなく、魔竜討伐は滞在時間5分で終わりを告げる。
剣や装備の微かな金属音のみを置き土産に、冒険者は竜のねぐらを一人後にした。
その強さだけを鮮烈に刻み込んで、いなくなってしまった恩人の背中を、男たちは呆然と見つめ……顔を見合わせる。

「不思議な冒険者だなあ。金になると真っ先に気づいたのに、追加の報酬すらねだらねえと来た」

「おまえさん、知らないのかい。「赤い」冒険者のアレスと言ったら、めっぼう強くて、めっぼう親切で有名なのさ」

「強いと余裕も生まれて懐も深いのかねえ。 まあ、あれだけ強ければ、すぐに喰いぶちも稼げるんだろう」

「欲の無いお人だ。最初の前金じゃ足りないくらい出来た恩を、返させないって言うんだから」

「それにしても、アレスの仲間の男は本当に来なかったなあ。あの冒険者もアレスほどとはいかずとも、風格はあったが」

「まあ、一人分の賃金でアレスを雇ってアレス一人が解決したんだし、俺たちからしたら幸運だったろう」

「……さて、おしゃべりはこれくらいにして、朝までにこの竜を街へ持って帰るぞ！」

老人やこども以外はほとんど集った、街中の男たちは、あらかじめアレスに指示されて用意した籠や道具を各々運び出す。
彼らの仕事はこれからだ――。

* * *

アレスが冬の街の門を潜ったところ、未だ深夜であった。
昼に活動する魔竜の身体が鈍る隙を突くため、街の男たちと共に討伐へ向かったのが、日付が変わった頃。
その強さと経験が無駄なく発揮したおかげで、一糸乱れぬ姿でアレスは分け目も振らずに宿へと向かう。
強いというなら、冬の季節に出歩いた影響で、ひとり。ひどく。身体が冷えていた。
街に残った女こども、老人たちはほとんど寝静まっている。
アレスは街を起こさないよう、極力音を立てず、モノトーンの街並みを歩き、主人も既に休んでいる宿屋へ滑るように帰った。

白い息を吐きだし、アレスは外気と寒風を伴って借りている自室の戸を開けた。

「寒ッ！！」

……部屋を暖めていた男の第一声だ。
顔だけアレスへ振り向いた人好きのしそうな顔立ちで、重たげな瞼の筋骨隆々とした男は、分厚い毛布を肩にかけ、湯気くゆるマグカップを両手に持ち、暖炉のそばの柔らかな椅子にもたれている。

部屋は暖炉の火でまるやかに照らされ、よくよく暖められていた。火が小さく爆ぜる音が耳を暖める。外との寒暖差で僅かに身震いしたアレスは、速やかに戸を閉めると、ぬくぬくとしていた男から視線を外し、装備や武器を片隅へと片付け始めた。マグを持った男もまた、再び暖炉へ顔を向け、ちびりと暖かい液体を舐めるように啜る。男たちの間に陰悪な様子はなく、むしろ互いを、あって当然の空気と言うほどにスムーズに受け入れていた。

アレスは装具を几帳面に畳み、磨き、軽装になると、布の塊になっている男の隣に座る。ようやく一文字の唇がやんわりとほどかせ、アレスは低く静かな声を発した。

「……予想通り、稀少種だった」

「そうか、そうか。畑に残っていた尻尾と爪痕からの読みは当たっていたのか。ほっとしたよ。街の男たちは置いてきたのかい？」

難敵と世間からは恐れられている魔物を倒してきた仲間を、倒して当たり前、というように男は肯定の意味で頷いたアレスへ話を続ける。

「恐らく、あれは群れからはぐれたんだろうなあ。元から寒冷地とは言え、あまりにも他の魔物や獣の気配がないのが怪しい話で……俺の見立てでは。長年の生態系をそいつが全部ペロリ……と平らげ、ついに目をつけたのが作物や人間……ってところかな。ねぐらは狭かったろ？」

「ああ」

「デカイ野郎二人が押し入っても、身動きが取れずに地の利がある奴さんに先手を取られちまう。それに、おまえは一人で倒せるし？」

それまでのことを滑らかに話し続けていた男は、は、は、と口を開けて笑うことで、話の区切りとした。舌を湿らせ、男は再び話し出す。

「バチなんて当たらないのに、また何も剥ぎ取らず帰ってきちまって、まあ。老いた竜でも心臓1個で1年は遊んで暮らせたぜ？俺のパートナーはほんとに、欲のない」

「……」

軽口に対しても、アレスは特に反応しない。興味がない、という方が正しく、言葉に対して憤慨することもない。男の軽やかでよく喋る口が、自分を傷つけるために動くことはない……と確信しているからだ。そのことをよく理解している男は、小さく笑うと肩をすくめた。まだ中身が残っているマグを煽り、腰を少し上げ、アレスの厚みのある唇へ、同じものを押し付ける。

竜を討伐した時すら細まりも広がりもしなかったアレスの瞳が、揺らいで瞬く。薄く開けた唇から押し込まれ、舌に乗ったのは、甘いココアだ。

「……ん、」

能面のようなアレスの顔が、ほろりと崩れ始める。飲み切れなかったココアの甘い筋が顎に伝う。こく、こくと口移しで渡される甘い液を、薄く目を細めながらひな鳥のようにおとなしく飲み干していく。

受け渡されるものがココアで味付けされた甘い唾液のみになると、アレスはねだるように、自分から舌を絡ませようと身体を男の方へ傾けた。

しかし、アレスの願いは果たされることなく、長く熱い舌はあっさりと口内から出ていく。

唾液の橋が暖炉の灯で一瞬光る。

アレスがこの室内に入ってから最初に表した表情は、「物足りない」だった。ひとつも乱れなかった息を、ふう、とつく。

目元を薄く赤らめ、男の舌の幻を追うように、小さく開けた口の中で己の舌をねぶる。

男は余裕げな顔を崩すことなく、苦笑いしてアレスの頭をぽん、ぽん、と軽やかに撫でた。かさついた指が、小さな傷の集合体が、頭の皮膚を刺激する感覚に、アレスは猫のように目を閉じる。

「ま、お疲れさん。今回もおまえのおかげで大勢の命を救ったんだ。ガッツポーズくらいしていいんだぜ」

「違う……俺とお前二人の成果だ」

「ええ？うーん、そりゃおまえ、それは、うーん、違いない。訂正、俺たちの勝利！」

「ま、ここんところ連続して参謀担当だったから、次の機会は俺が切り込み隊長をやろうかな。アレスくん、きみもたまには頭を使いなさい」

「うん」

調子のいい男の言葉にも、アレスは少年のように素直に頷く。
形のいい頭を撫でていた手が、滑るように頬に下り、がっしりとした顎をさする。
愛玩動物さながらの扱いに対しても、嫌悪を表すことはせず、むしろアレスは目を閉じ違う人間の皮膚や温度による心地よさを受け入れていた。
色濃く生えそろった形のいいまつげが溶け広がるように目を縁取っている。太い骨と少し丸みのある頬は、更なる心地よさを求めるように未だ上気していた。
手のひらの温度を明け渡すように頭や顔を撫でていた手が首筋へと向かうと、のびやかな筋肉を内に秘めた健体が、椅子から離れ、剣をふるう太い腕を、男へゆっくり伸ばし、距離を縮める。
男もその動きを予測し、太い腕同士が折り重なり、正面から男たちは抱き合った。
アレスは分厚い電気羊のカーペットに膝立ちになり、その鋼の身体を覆いかぶさるようにヴェクターの太い腕がまず背中へ回る。
タイトなスーツを着たアレスの身体が密着すると、男はおやっと目を丸くし、器用に片眉を上げ、こっ
ん、と目の前の額に額を合わせた。

「まだ冷たいな、身体。ちょっと夜に出歩いたくらいで、芯まで冷えてる。やっぱり温感薬を買おう。春まで街に引きこもって待つには、この大陸の冬はどこよりも長い」

「おまえは、……熱いくらい」

「そりゃ、そう。俺はいま暖房具だから」

布の向こうから伝わるヴェクターの身体は、うっすらと汗ばんでいた。熱を出した病人のように、その身体は熱を帯びている。

「……？」

「おまえを暖める役目を暖炉になんて譲らないってことさ」

狭い宿の一室。音楽の代わりに、火の爆ぜる音が、囁くようになり続ける。
冬の子守歌を口ずさむ暖炉の前でも、アレスの瞳の朱色はむしろ穏やかさを失くしていった。
形のいい唇がきゅっと一文字に引かれる。
酸いも甘いも通ってきた、冒険者という人生を送ってきた聡明な戦士の身体は、少なくともこの瞬間は、寒風で冷えきった恋人を暖めるために用意されたものであった。

信頼され、受け入れられ、冷えた身体を当たり前のように温めてくれる、人の形を持った帰る場所がある。
与えられる愛の表現が穏やかであればあるほど、アレスの心臓は早く動いた。
目の前の暖かなひとは、「愛されている」という形のないものを、「事実」として。暴力的なまでに、アレスの脳髄に叩きこみ続ける。

高鳴る心臓の音と動きを、頭のいい男が勘づかないワケは無かった……が、一方、ヴェクターの表情は極めて平和を貫いていた。
肩を、腕を、背中を、よしよし、と全身をさする節くれだった大きな手に、一仕事終えた男を高ぶらせようという意図は、一切含まれていなかった。むしろ、分厚い毛布にくるむように、赤子をあやすように、寝かしつけるように、ヴェクターの手は、暖めた身体は、百パーセント慈しみを孕んでいた。この室内を、小さくなっていく焚火と、二人分の寝息で包ませようとするように。

脇腹を擦り上げられると、温度を与えられて感覚を取り戻し始めた身体が、慈しみの向こう側に快感を拾い取った。アレスの肩が切なげに寄ってねだるように身体をくねらせても、ヴェクターはすり寄ってくる大きな身体を暖めることに熱心だ。

脇腹を、脇の下を、腕を、胸を、腰を、手が通り過ぎていくたびに飢えた身体がどうにか快楽を拾おうと吐息が漏れる。
魔物の肉をよく食べ豊満な胸についた、豊満な乳首の先端に指が掠った瞬間、ついにアレスは顔を横に逸らし、明確に喘いだ。

「あ……あ、ヴェクター、……」

「うん、うん。ようやく暖まってきたな。 もうとっとと寝ちまうか」

「い……やだ」

「ええ？ベッドの中にもお供しますよ、暖房具が。抱き枕にもなってやる。それで朝までポカポカぐっすり、いや？」

「嫌だ」

子どものように、アレスは頭を緩く左右に振った。地団太を踏む代わりに、身体を持ち上げ、擦り付ける

ように恋人の身体へ飛び込んだ。 戦士一人分の重量に、恋人はぐえ、とつぶれたような声をあげつつ、しっかりと腕を回し、支えてみせた。 すり、すり、すり……大きな胸を、恋人の胸に押し当て、擦る。

「あ、ふ♡う♡……う、んっ♡ んっ♡……はああ……♡」

胸の間で乳首が押しつぶされた瞬間、かあっとアレスの頬は薄桃から朱色へ染め上がる。 これまでで一番直接的な快楽に、アレスの理性はあっという間に端から焦げていく。

「……寒いから、乳首ガチガチに硬くなってるな。服越しでも、よくわかるぜ」

「うん、うん♡……直接、確かめてくれ……♡」

背中に回された片方の腕を柔らかくはぎ取って、手首を掴み、自身の胸元へぐっと近寄らせた。 ヲェクターの手はなすがまま、先ほどまで献身的に恋人を労わった指先は、今は意思を持たずくたたりとしている。

急くようにアレスはヴェクターの指先を己の乳首へ押し当てた。芯を持った乳首と、力が入っていない太い指が布越しに触れあう。 自分じゃない手によって与えられる、種類の違う快楽は胸先から感じるものの、アレスを満足させるものではなかった。

「は……なんでっ……？」

「なんでって……確かめたよ？アレスの乳首の先端が勃起してて、デカイ乳輪も膨らみきってること」

「あ……♡ つ違う、そうじゃない、だろ。 もっと、いつもみたいに、してくれ」

「でもなあ。アレスのエロい声にびっくりして、宿の連中みーんな飛び起きちゃうかもなあ」

「は、あ……我慢、できる、する、」

すっかり「赤い」アレスは室内の影に吸い込まれ、肉の中まで愛されたいという欲を持つ、ただの青年アレスがそこにいた。 さらに強く指先を押し当てさせ、乳首の先端を刺激するため緩く上下に動かす。

「ほんとに？メス声我慢できなかったら、宿屋の人間全員に、チンポハメられて喜ぶ開発済ドスケベ野郎ってばれちゃうぞ？」

「ん……っ♡」

「狭い街だからなあ、娯楽も少ないし、部外者の俺らは今一番の話題の種だろうよ。あっという間に、宿から街中にばれちゃうだろうなあ～……あの強くてかーっこいい、魔竜も一瞬で倒した英雄のケツが、チンポ啜えてイキ潮吹くのが大好きなドスケベマンコだって……、町長のおっさんから、雪遊びするこどもたちにまで、みいーんな……おまえがすぐ発情してチンポ欲しがってよだれ垂らすド淫乱だってバレちゃうなあ……♡」

「……っ♡ ……っ、♡ ……っ♡♡」

囁く声はどこまでも優しく、アレスを追い詰める。ヴェクターが一言、一語話すたび、アレスの呼吸は浅く湿り、口内に急速に溜まる唾液を喉に押し込めることに必死になった。魚のように口を開閉させ、水面のように静かだった瞳は、いまや淫語による言葉責めを前に、期待で薄く膜を張り、暖炉の火できらりと光る。 だが、熱で溶けてなくなりかけている理性は、わずかに保っていた。犬のように浅かった呼吸が僅かに落ち着き、切なく吐息をこぼしながら、ヴェクターを見下ろす。

「なにもせず、寝たい、なら……俺も、そう、する……」

「なにもしないって、俺の手とか太もも使ってオナニーもしないってことだぞ。抱き合って寝るだけ。できる？」

「……ヴェクターも、もう勃ってる、くせに……」

「恋人がエロいから、生理現象だな」

アレスが指摘した通り、胸をこすり合わせたころから、すでにヴェクターの性器もしっかりと勃起あがっていた。

余裕を見せるヴェクターを、悔し気に唇を食んで軽く睨みつける。まるで自分だけ興奮しているかのような状態に、壁際に追い詰められたようだったが……アレスは意を決したように、あっさりと抱き着いていた恋人の熱い身体から身を離れた。反動で、ズボンの中で窮屈そうにちぢこまっている性器が、わずかに跳ねる。

鼻歌でも歌い出すかのようなヴェクターの表情が、ここで初めて崩れた。先ほどまで言葉でいじめていた長身の恋人の突然の変化を、訝し気に見上げる。

恋人と目を合わせながら、アレスは身にまとうスーツに手をかけた。体に張り付くようなタイトなシルエットのスーツは、工芸が得意な種族の鉱山に住み着いた、死肉と岩でできたゴーレムを倒した時に種族一番の職人がアレスのために作ったオーダーメイドの全身鎧だ。薄く頑丈で伸縮性も抜群、防水防火防毒、ありとあらゆる危機から最低限で最善の重量で守る、まさに鉄壁。その叡智の集結とでもいうべき装備を、慣れた手つきで縫い目をほどくと……黒い鎧の中から、ムワッ♡と甘い湯気を立てほどよく日焼けした肌が露出した。汗で照りついて発情仕切った素肌を、腹筋を露出させていき、まずは上半身から鎧を脱ぎ去ると、恋人に揉みしだかれ柔らかくなった大きな胸筋と、可愛がられすっかり性器となった血色のいい、乳輪ごとふくらんだ乳首が二つ、触られたがって微かに震えた。勃起して脱ぎづらくなった下半身の部位を下着ごと取り去ると、ぶるりと子どもの腕ほどある勃起した性器が大きく跳ねた。すでにペニスの先端からはだくどくと愛液で小さな滝を作られており、そこから竿を伝い金玉を滑り落ち、ふとももまで流れ着いている。塗れた太ももと締った腰を繋げて飾るのは、簡素なベルトで作られた黒いガーターだ。何を留めるでもなく、発達した筋肉で丸太のように太くむっちりとした太ももを飾るための、恋人を喜ばせるためだけの、特に能力も特徴もない装飾品だった。

機能性のない、興奮を煽るためだけのガーター以外裸になったアレスは、自分が座っていた椅子に鎧をまとめて放り出すと、改めて椅子に座って慣れないストリップを鑑賞していた恋人へ向き直る。一瞬見た彼の下半身は、先ほどより膨らんでいるように伺える。好意や関心のない人間からしたら、軽薄と評されるかもしれない笑みを浮かべていたヴェクターは、すっかり固唾を飲み予測不能な恋人の様子を見守っている。

脱いでいる間の羞恥心で身体を火照らせ、自分の性欲をより追い込んだアレスは、足を大きく開き、後ろに回した両手で、鎧を転がした椅子のひじ掛けの部分を掴んだ。自然と座っているヴェクターへ腰を突き出す姿勢になると、荒くなる呼吸を必死に抑え、腰を小さく揺らし始める。腰を揺らすと、勃起したチンポも同じリズムで揺れる。……男を誘う知識のない頭が導き出した、必死な媚び踊りだ。

最初は恥ずかし気だった小さな腰揺れを、アレスは耳元まで真っ赤に染め上げながら、意を決して少しずつ大きく腰を上下に振り出した。揺れるふり幅が大きくなるにつれ、自然と股は大きく開き、ガニ股になっていく。ぶるぶると情けなく揺れるチンポは、よだれを愛する人へ向けて飛沫を飛ばした。

「した……いっ♡ ドエロってばれても、いいから……っ♡ヴェクターと、セックス♡したいっ♡ 俺の、俺の尻、♡ケツ、……マンコッ、ケツマンコッ♡を……っ♡ヴェクターの、チンポ、で、トロトロにされたいっ♡ ザーメンいっぱい、欲し……いっ♡」

普段は簡潔に、言葉を出力する、感情の薄い低音の聲が、上ずり、ひっくり返り、「恋人をその気にさせる」ために一生懸命慣れない淫語を赤面しながら、か細く鳴いた。余りにも低俗で、あさましく、つたない誘い文句をひねり出すたび、数時間走ってもびくともしないふとももが恥ずかしさのあまりびくびく♡と震え、性器に作り替えられたアナルから透明な体液がじゅわじゅわと足を伝い落ちる。へこへこ腰を振り、恋人の視線で感じた全身が汗を吹き出す。すっかりのぼせ上った身体は、次第にアレスの思惑の外へ向かい変化していく。

「はあっ♡は……あっ♡ヴェクター♡お願い……だから……っ♡ヴェクターも、チンポハメたいって、思ってくれ♡早くっ♡早く♡じゃないと……っ♡じゃないと、♡」

「……見られながら腰振ってるだけでイキそうだって？」

「あああ……っ♡」

父性すら垣間見えた軽快な声色は跡形もなく、興奮で掠れた声が耳に入ると、アレスは小さくのけぞって一際チンポから我慢汁をまき散らした。ポンプのように止む気配はなく、ヴェクターの衣類やカーペットを濡らせ濡らしている。ヴェクターの指摘通り、アレスのチンポは龟头がかわいそうなほど膨らみ、腰振りの刺激と羞恥心のみで射精しようとしていた。金玉が急ピッチで精液を生み出し、チンポがズン♡と重くなった感覚を感じながらも、アレスはなんとかのけぞった顔を天井から恋人へ下ろし、小さく頭を振る。

「いや……っだあ♡やだ♡セックス♡セックスでイキたい♡ヴェクターに触れられてイキたいっ♡やだ、やだ♡恥ずかしい、やだ、チンポ♡チンポくれ♡やだ♡ゆるしてくれ♡だめっ♡イクッ♡イクからっ♡がまんできない、♡イキたくない、腰とまらない、いやだっ♡」

大きく揺れていた腰の動きは、射精に向かってすっかり小刻みになっていた。見えない性道具にチンポを抽出するように浅く律動し、とろり、と白濁交じりの愛液があふれていく。

「あっ♡あっ♡あっ♡ やだ！だめだ、きもちいい♡やだ♡イク♡やだ♡セックスしたい♡ヴェクターの、ヴェクターのチンポ、チンポチンポチンポッ♡欲しい、やだ♡イクッ！♡イグッ♡やだっ！♡」

「やだじゃないよな♡そのままイケッ♡チン媚びダンスでイケッ♡おあずけされたままイッチまえっ♡」

「あ、おっ♡おおっ、あ、イ、っううぐう〜〜〜ッ！♡♡」

ビュビュウッ♡ビュッ♡ピュッ♡ビュウウ……ッ♡

一切触れられることなく、追い詰められたチンポが、許しを得た瞬間、羞恥心で構成されたザーメンを勢いよく吹きこぼさせる。
数秒、数十秒と射精は止むことなく、ビュルッ♡と太い粘液を吹き出すたび、アレスは悩まし気に剛体をくねらせ、眉を寄せ歯を食いしばった。
湯気すら幻視できるほど濃厚な大量射精をしたにも関わらず、望みを叶えられていないチンポは未だその怒張を天井へ張りつめていた。
視線と情景だけで射精させられたアレスは、物欲しそうに瞳をうるませ、内股になりかけた足を再び大きく開く。
射精の余韻で荒れた息を整う余裕もなく、アレスはなお目の前の男に好きにされたがっていた。
余りの勢いで全身を自身の熱く粘ついた白濁で濡らしたまま、アレスは余韻で小さく震えたまま、ヴェクターに背を向け、尻を向ける。

「あ……あ、ヴェクター……ヴェクター、ぜんぜん足りない、ひとりじゃやだ、一緒の方が、きもちいい……」

後ろ手で掴んでいた椅子の背もたれに向き合い、今度は前から掴むと、顔だけちらと恋人に振り返り、ふり、ふり……♡と尻を振って媚び始めた。
意思なく射精させられたアレスの頭は、目の前の男のチンポで犯されることしか無い。
言葉すら柔くふやけ始め、組み立てた単語の結び目が幼くなっていることを気にも留めず、恋人の情欲を煽ろうと必死だ。
片方の手で、同じ側にある肉厚な尻肉をたどたどしく開くと、小刻みに収縮する縦割れのアナルが、発情した色調で存在を主張する。
きゅうきゅう♡くぱくぱ♡と愛され抜かれて性器と化したアナルから、ローションのように体液が零れ落ち、分厚い尻肉と尻肉の間に幾重も糸の橋を作っていた。
指どころか、チンポを突っ込まれてもあっけなく受け入れるだろう、ぷっくりと膨らみ穴の肥大したケツマンコを見せつけ、その事実のアレスは再び追い込まれ始めている。

それまで黙って座り続けていた男の影が、口の代わりに揺れた。

肩にかけていた分厚い毛布をするりと椅子に落としながら立ち上がると、なだらかな山のようなだったシルエットは、一瞬で、勃起した男へと移り替わる。

「あ……あっ、あ……♡」

薄手のローブの腰ひもを荒々しくほどき、脱ぎ落して全裸で迫るヴェクターを前に、アレスは歓喜してか細くわななく。
ぐくり、と期待で精製された唾を飲みこんで、犬のように呼吸を荒げ、次の行動を待った。
ヴェクターもまた、この日まで生きてきた冒険者の一人だった。全身に切り傷やケロイド状の火傷痕をまばらに散らばせ、鍛え上げられた生存のための、発達し盛り上がった筋肉が、薄く纏わせた汗で暖炉に照らされ光輝いている。

初めて、ヴェクターは自らアレスへと触れた。アレスが手で開いていない方の尻たぶを、遠慮なく掴み、開く。
片側だけちらと見えていたアナルの姿が、二人の手によって、開発されきってぐずぐずのケツマンコだと、見下ろすヴェクターの視界からははっきりと映った。
尻に感じた高い体温に、アレスは小さく喘いだ。注目してもらっているケツマンコに力をいれ、一際すばみ、開いて、を繰り返して、ここにチンポを入れると気持ちいい、とアピールをする。
大きく左右へ開かれた尻たぶが、掴んだヴェクターの手によって揉まれ、形をゆっくり変える。円を描くようにゆっくり手を動かし、己に媚びる姿を無視して、尻肉の弾力を確かめるように揉みしだく。そのまま堪能されるかと思いきや、ヴェクターは尻を突き出し中腰になっているアレスへ覆いかぶさった。
アレスのアナルをケツマンコに変えたチンポを尻肉の間に挟みこみ、両腕をアレスの胸元へ回す。

「あ……っ♡あ♡チンポ♡やっど……っ♡ヴェクターのチンポお……っ♡あつい、はやくっ、はやくチンポくれえ……っ♡」

後ろから抱きしめられ、待望のチンポの熱を感じ、目を閉じより眉を寄せる。
すっかり首筋まで真っ赤に染めあがったアレスは、背中越しから伝わる恋人の温度に安心したのか、頑なな口角がやわく上がった。緩んだ口から小さく舌を出し、零さないよう尽力していた唾液が口の端から溢れさせる。

アレスの要望は叶うことなく、ヴェクターは腕をほどくと、すぐ下にある彫刻のような腹筋を撫で上げ

た。温度を分け与えるのではない、更にアレスの心を乱せようとする、下心のある動きだ。犬の腹の毛をなぜるように、指の腹で発情してぴくぴくと跳ね上がる腹筋や脇腹をはじめ、太ももの内側をさすり、練り上げるように、どこもかしこも豊満な肉を掴んで、まだ隠れているアレスの欲情を丹念に吐きださせる。

「はあ……っ♡あああ……っ♡はやく、はやくう、っ！？♡ひ、ん`っん！♡」

耐えきれずもじもじと腰を揺らし、挟んだチンポを刺激しようと尻を動かすアレスだったが、ケツマンコと同じように性器へと作り替えられた乳首をきゅっ♡と両方つままされると、刺激の強さに動きを止めざるを得なかった。

乳輪と乳首の境目の根の部分をしっかりつまみ、絞り出すように前方へ引っ張り上げる。かと思えば、引っ張った乳首を反対方向、乳輪へ向かって根を埋め込ませる。そして伸ばすようにまた引っ張って、乳輪に向かって戻す……ゆっくりと、緩慢な動きで、伸縮を繰り返す。

「ああ……っ♡はああ……っ！♡や、オお♡おおっ、おお……んっ！♡おオ`っ！あ`あ、ん♡それ、や、だあ～……っはあああオ`ッ！♡」

「もっと確かめておこうかな一つ」

「はあ、あ♡え？ な、に？っ！ ひっ♡！い`ッん`ッ！！♡」

それまで表面を擦ってきた指先が捻り上げると、アレスは目を白黒させ一際大きな声で喘いだ。ギュッ♡ギュッ♡と硬くそそり立った乳首をつまみ、つま先でカリカリ♡と側面や乳輪をいたずらに擦られるたび、身を硬くさせ、挟まれたままのチンポに尻を擦り付ける。己の指の動く先全てにひとつひとつ反応し汗を垂らすアレスの後頭部へ、ヴェクターはわざと声を低く話しかける。

「また感度上がった？ どんどんエロくなっていくな。そのうち乳首撫でるだけで射精できるかもな？」

「あ……っ、あ、いやだ、それ、言葉で、いじめるな、わかりや、わからなくなる、から」

弱弱しく湯だった頭を振って抵抗している間にも、アレスのチンポは再び昇りつめようと粘ついた愛液を吹き出し、椅子の側面を汚す。借宿を汚す恋人の水音に、胸を責め立て続けながら、ヴェクターはフッと愛おし気に笑う。葉も倒せないほどのささやかな呼吸だったが、アレスの頭を溶かすには十分すぎるほどのきっかけだった。

「う`っ♡イクッ♡またイク♡乳首でイクっ♡まだチンポハメられてないのにイクッ♡！ 乳首、乳首でイクのやだ♡」

「どうして？ こーんなに、気持ちよさそうなの？」

「ちくびでイクと、あたま、あたまぼーっとする、から、やだ、ぼーっすると、ヴェクターを、かんじられない」

射精欲に侵されている中でも、快楽より繋がっていることを確かめたいと、アレスはゆるんだ口と舌で伝える。その健気さはヴェクターの「ツボ」によくよく効いたらしい。ヴェクターは小さく息を飲んでから唇の表面を掠るように舌なめずりすると、乳首をこね回している手の動きを速めていく。

「大丈夫、頭で感じられなくても、ほら、こうやって……♡身体が感じられるだろ？」

「アあ、ツオオおお`ッ♡オオオッ、オ`♡」

「安心してバカになれ♡ 俺の前で、だけ、バカになって、思い切り甘えていいんだから……♡」

「んヴッ♡ん`ッ♡ んっうヴ~~~~♡！ ンッ！♡ イッ♡ ……ツく、う、ん、うん……ッ♡！」

喉を絞るように、獣のようなうめき声を出しながら、アレスは椅子へ向かって二度目のザーメンをぶちまける。一度目と遜色ない、むしろ濃度の高いザーメンは、量は同じだが、とぶ……♡とぶ……♡と緩慢に糸を引きながら、時間をかけてひり出されていく。アレスが乳首イキで身を震わせる間も、ヴェクターは搾り取るように乳首を弄ってやるのをやめない。

残り汁がとろとろ♡と溢れ続ける中、依然硬さも勃起も止まらないチンポを持て余し、アレスは長く甘い息を吐きだしながら、胸に充満する多幸福感に動きを止めていた。腰を突き出し、ヴェクターのチンポを挟んだままの尻肉は、ヴェクターの我慢汁でぬめり、淫猥に照り出している。尻の谷間はすっかりチンポ液

で浸かっており、射精の余韻で身体が震えるたびたぷ♡と波打って零れ、ふとももに伝い落ちて行く。

ヴェクターは名残惜し気に震えるチンポをアレスの尻肉から離すと、肩を掴んで自分の方へ振り向かせ、小さく喘ぐ唇に、音を立ててキスをする。

「すっげーエロい顔。よだれもこんなに垂らして、なあ？ いつもキリっとしてる眉毛も、ふにゃふにゃだ」

「は……っ♡は……っ♡ はあ……っ♡」

「そーかそーか、言い返せないくらい、頭ふやけてるか♡ いいよ、おまえはそれくらい、何も考えなくなったって」

そう呟くと、ヴェクターは再びアレスの唇を塞いだ。今度は深く、緩く口内を空けたままだったアレスの肉厚な舌を舌で捕まえて、音を立てて吸い取ってやる。待ち望んだ口淫を、アレスは薄く涙の膜を瞳に張りながら受け入れた。

ぐちゅぐちゅとはしたくない音に耳を犯されながら頭を撫でられると、アレスは鳥肌が立つような、ザラついた多幸感に身を震わせた。パチン♡パチン♡と頭が爆ぜるような音を幻聴しながら、それでも自分から口を離すことは無い。ヴェクターもまた、呼吸が続く限り恋人の舌を捕まえ、すり合わせ、お互いの唾液を混ぜ合わせるようにわざと音を立てながらディープキスに耽る。

「はあ……っ♡ちゅっ♡んちゅっ♡ちゅ♡ヴェクター♡ んじゅ、んっ、く♡ んん`♡」

二人分の唾液を、アレスは嫌がる素振りなく、こくこくと喉を鳴らし飲み干していく。よく鍛えられた丸太のような太ももが、ヴェクターの手によって片方持ちあげられる中でも、アレスはディープキスに夢中になり、うっとり目を細め、恋人の舌にむしゃぶりついている。

「ん……ぷっは♡ がっつきすぎ、可愛いからいいけど。……キスだけにする？もう満足？」

太ももが持ち上げられたことによってあらわになったアナルに、ぴた♡とヴェクターのチンポの先が宛がわれる。

アレスは頭をこどものように振って、自ら腰を落とそうと躍起になりながら一際大きく身を震わせた。

露骨に息を乱れさせる素直なアレスの額に小さくキスを落とすと、焦らしに焦らされてほぐれ切ったケツマンコへ、己の太いチンポの切っ先を挿入し始める。

つぶ……♡ぬぷっ♡ぐぷ……っ♡

「あ`ッ♡」

アレスは顎を天井へ向かって逸らし小さく喘ぐと、ぷしゃっ♡と愛液を噴出させた。待ちわびた肉の中への刺激に、入り口に押し入れただけであっという間に全身がのぼせ切る。焦らされ連続射精させてきた恋人の身体を労わることなく、その様子を認識しながらも、ヴェクターは無情にも、いきり立たせたチンポの末端まで一気にアレスのケツマンコを貫いた。

ずっ……ぷ♡ぬちちちっ♡ずにゆるるるるるううっ♡♡

「——ッ！！ ♡♡ッ！？」

ビュルるううッ！びゅううう～～っ♡ドプッ、ごぶ……♡

瞬間。息を止め、アレスは射精した。上向いたチンポから噴水のように溢れ止まないザーメンが上半身を汚し、こどもの玩具のようにガクガク♡と静かに身体を震わせる。

「おお……っオ`♡ ……ッ♡ ……ッオ`！？ あッ、ぎっ♡ひん♡まっ！？♡……ッおうっ！♡オおッ♡」

ずにゆるるるるっ♡パンッ♡ぱんぱんぱんぱんぱんっ♡

絶頂し昇りつめたアレスを休ませないと言わんばかりに、断続的な音と共にチンポを小刻みに抜き差しする。

ヴェクターによって日々愛されてきたアレスのケツマンコは、前立腺のみならず肉壁を擦り上げるだけで甘い声を上げた。

大量の腸液でふやけたケツマンコは、一切の引っかかりなくヴェクターの太いチンポをごくごく♡と飲み込む。

奥深くまで恋人チンポで満たされるたび、アレスのチンポはぷしゃ♡ぷしゃ♡とチンポ汁を出し返事する。すっかりヴェクターの極太チンポに慣らされ、柔らかくとろけたケツマンコを、ぎゅうぎゅう♡と搾り取るように括約筋に力をこめた。

恋人を気持ちよくさせるためだけに、回らない頭の代わりに鍛え上げた身体を使い、ヴェクターの息を乱れさせた。

「ぐ……うっ♡ ほんと、どんどん俺好みになっていくな、おまえは……っ♡ 奥にザーメン叩き込んでやるからなっ！身体の中も暖めてやる……っ！♡」

「っんお♡おおゝっ♡んあゝッ、ん♡あんッ♡ ヴェ、クター♡ヴェく、た♡ おれ、おえの、まんこでっ♡いて、ひんゝっ！♡いってくゝえ♡」

「は……あっ♡出すぞっ♡ ザーメン叩きつけられてイッちまえっ♡種付けされてイけ……ぐ……っう、うオ、おゝっ、オゝッ！♡」

「イっ、う♡ うっ♡ うッ♡ ウゝ、うん……っ♡ おっ、オゝ♡～っほお、オゝ お～～……っ♡」

どっちゅ♡どっちゅ♡どっちゅ♡ぶちゅ……っ♡びゅ！♡ビュぶるるッ！♡ごぶっ……どぶ……っどブン……っ♡

限界まで張りつめたヴェクターのチンポは、一際奥深くヘケツマンコへ打ち込むと、濃くゼリーのようなザーメンで遠慮なく内部を満たす。大きく開かれた入り口のフチから、こぶ……♡と熱い精子が溢れていく。

「っほ、おゝ♡ヴェクター……♡ お、は、あ……♡」

焦げるような熱さに満たされ、アレスはうっとり目を細め、犬のように舌を突き出す。それまでとは違い、恋人のおねだりにヴェクターは望み通りキスで答えた。正面から抱き合うために、アレスのケツマンコを蓋をしていたチンポがゴボッ♡と下品な音を立て抜かれていく。

肉厚な身体を寄せ合い、互いの広い背中に腕を回し、舌を絡ませ合う。全身汗やあらゆる体液で汚し合った二人の身体は、湯気が立つほど暖まっていた。

「ちゅう♡ うっうん♡ ん♡ つうふう、うゝん……ちゅ……っう♡」

暖炉の火は火照った二人と対照的に、柔らかくその火力を落とし始めていたが、玉のような汗を零す二人は気にも留めない。どちらかともなく、衣類や体液で乱れたその場をそのままに、傍のベッドへ絡み合いながら進んでいった。

もつれ合いながら毛布で膨らんだシングルベッドへダイブすると、二人合わせて百キロは余裕で超える重量を受け止めたベッドが、ギシ！と悲鳴を上げる。

窮屈なベッドの上でごろり、とアレスを寝転ばせ、ヴェクターは上半身をむくりと起き上がらせた。アレスの分厚い身体へ跨り、乗り出す。大量にアレスのナカヘザーメンをねじこませたばかりとは思えないほど大きく膨らませたチンポを、そっとなアレスの口元へ近づけた。先ほどまでケツマンコを苛めていたチンポは、己のザーメンとアレスの体液をべっとりまとわりつかせている。濃厚なセックスの残り香がむわっ♡と立ち込め、アレスの嗅覚を刺激した。

アレスは眼前に差し出されたチンポに何も言わず、甘く吐息をひとつこぼすと、口をぱか♡と開け、はぁ、はぁと口呼吸する。そのぬるい吐息が赤黒い先端に当たると、ヴェクターは予想外の刺激に眉を潜め、ぶるりとアレスの身の上で小さく喘いだ。

「お……っう♡」

「ふ……♡」

その姿を見上げ、愛おしさのあまりアレスは思わずごく小さく吹き出した。

「なに笑ってんだよ……」

ヴェクターは拗ねたように唇を尖らせた。昂らせたチンポとその幼子のような表情のギャップに、アレスは目をとろん♡とさせながら笑みを抑えることが止められない。ヴェクターは少し慚然としつつ、べっとりとザーメンや体液をこびりつかせた使用後勃起チンポを、アレスの厚みのある唇へ押し当てた。

「ん……♡っう♡ ああー……ん♡……っん、むじゅ、う♡ちゅうっ♡りえろ……っ♡」

ちゅ♡と唇を尖らせ、ぷくりと汁を零すチンポの先端に軽く挨拶のキスをすると、口を大きく開け、はぶ♡とチンポを頬張った。熱い口内の中に先ほどまで自分を追い詰めた肉厚のチンポを招き入れると、舌をぐるりと回し、こびりついたザーメンをこそぎ落とすように舐め回し始める。太いストローにしゃぶりつくように、尿道に残ったザーメンを、音を立て吸い取り、高いカリの裏側も怯

まず舐め付いた。

「ふう♡ うん……♡れろ♡れる……♡ちゅ、ちゅ♡じゅずるる♡ぢゅ♡う♡ はぶ♡ふう♡ん♡う♡ん♡」

「ふー……♡ふうー……♡お掃除フェラもすっかり上手になっしまったな……♡ ほら、竿の部分も……♡」

言われるがまま、亀頭にむしゃぶりついていた口を離すと、体液をこそぎ落とされた亀頭がつやつやと唾液で光る。

たっぷり唾液を纏わせた舌の表面で、未だ体液がついた太い竿の裏筋を、鼻先や頬にチンポが当たっても怯まず舐め取り出す。時折ちゅ♡ちゅ♡とチンポに口づけながら、顔を右へ左へ傾け、夢中でチンポを磨いていく。

「れる♡れる……♡う♡ ちゅ♡ちゅ♡ ちゅ……♡ちゅ♡ りえ♡りえ♡じゅ♡ぶ♡ちゅ♡ちゅ♡、う……♡」

「フーツ♡ふう♡く♡……チンポ、ふうー……♡美味しいか？」

「ちゅ♡じゅ♡じゅ♡ちゅ♡ つう♡ん♡ う、ん♡ ヴェクリやあの、ちゅ♡じゅ♡じゅ♡チンポ♡ちゅ♡ぶ♡おいし、……♡」

目を閉じ、問われるがまま、チンポに唇をつけたままもごもごとアレスが喋ると、ヴェクターは太い喉仏を晒しあー、と声を上げる。

そのまま後ろに下がると、同時にまんべなく唾液にまみれ、てかてかとぬめり輝くチンポがそっとアレスの口元から離れていく。

名残惜し気にれる♡と舌を伸ばし、頭を動かしてチンポを追いかけるアレスに、ヴェクターはふっと苦笑いして腕を伸ばし、頭を撫でてやった。

くったりと厚みのあるかけ毛布の上にアレスは呼吸で隆起する大きな身体を横たわらせている。ヴェクターと対比し、歴戦の身体に目だった傷痕は無く、代わりに汗とザーメンの残滓が腹筋の溝やぽってりとした胸筋に流れ落ちた。

全身をすっかり火照らせたアレスの両足をヴェクターが抱え込むと、その動作だけでアレスは息を飲み、目を細めて頬を赤らめる。

股を大きく開かせ身体を押し入って、チンぐり返しの体制になると、先ほどの射精によってケツマンコからとろお♡と濃いザーメンが滴り落ち、可愛がられた入り口がひくひく♡とねだるようにピンク色の肉壁をちらつかせ、よだれを垂らしている。

「まだこっちも、食い足りてない……だろ？♡」

ちゅ♡とほぐれきったケツマンコにびたり、綺麗になったチンポで口づけると、こくこく、と幼げにアレスは頷く。

同意を受け取ったチンポを、ゆ……♡と熱い肉内に埋めていく。

にゅ♡……♡ぶ♡ にゅ♡ぶ♡……♡ぶ♡……♡ずゅる……♡る♡

「はあ……♡ お♡オ♡ ふっ、ふう～……♡」

「はー……♡あったけ♡……♡」

先ほどの追い詰めるような挿入とは違い、一度深くケツマンコの奥まで侵入すると、うねる腸壁を楽しむように、ヴェクターは腰を緩慢に動かす。抜き差しせず腰を回し、吸い付いてくる腸壁を竿全体を使って撫であげる。

挿入したまま、どちらからともなく腕を伸ばし合うと、むっちりとした胸筋を押し付け合いながら密着する。抱きしめ合うことでより深くチンポがケツマンコの内部を進むと、アレスは持て余した長い脚をピン♡と爪先まで伸ばした。

「はっ♡は♡ はっ、ん♡ あん♡ くう、ん♡ ヴェクタ……♡ あ♡ くちも、くちさみしい♡」

「はいはい♡ アレスはキスハメされながらイクの大好きだもんな？」

浅い息を抑え込み、甘えた囁き声のおねだりに、ヴェクターは同じ声量でひそやかにからかって、突き出された舌先にちゅ♡と甘く音を立てキスして応える。 幼いこどもをなだめすかすように、ねだられた唇以外も、頬や脛、眉尻……顔面をついばむように口づけてやれば、アレスは思わず顔を背け、くふ、と笑う。

「うん♡ うん♡ チンポずぼずぼされながらキスするの、すき……♡」

肌を密着させ、汗を混ざり合わせるように手を這わせ、身体をすり合わせる。ゾクゾク♡と背筋を這い上がる快感に、アレスは更に身体を近づけようと腕の力を込めた。

「ほおっオ♡ツオ……♡ はあ……ん♡あん♡ こえ、すき……♡あつい♡すき……っ♡」

喉の奥から絞り出すような、充足感に満ち溢れた、鼻の抜けた甘い声を、抱き着いたヴェクターの肩にくぐもらせる。その籠った息にヴェクターはくく、とくすぐったように身を揺すった。赤く染まった耳のふちに口づけた後、それを合図に、芯を保ったまま暖まったチンポで緩み切った前立腺をとん♡とん♡と甘くつつく。

どちゅ♡どちゅ♡どっちゅ♡どっちゅ♡ずゆるっ♡じゅぶ♡

「っあゝ！♡ っあん♡ああ、っん！っうう♡ ひいゝっ♡っうゝ♡」

暖かい湯に顎まで浸かったようにそれまで緩み切ったアレスの身体が、ぎくっ♡！とヴェクターの腕の中で跳ねる。

ぱっかりと口を開け、舌を時折出しては、与えられる快楽を貪る。突き立てるのではなく揺るように、絶頂までの時間を引き延ばすために、二人はゆっくりと息を合わせ抱きしめ合う。

再び恋人の腹を満たそうと、急ピッチで精液を作る金玉がべち♡べち♡とアレスの尻を叩く。

緩やかに前立腺をトン♡トン♡と一定のリズムで叩かれ、つつぱる足を無理やり太い腰へ絡ませ、甘えるように密着を深めようとする。

それにより答えるため、ヴェクターは喘ぎ続ける口を塞いでやった。

「んゝ♡ちゅ♡ じゅちゅ♡ んゝ♡っじゅう……♡んゝ♡ ツ！♡んんゝ♡ っう！♡あんゝ♡ っ♡」

呼吸の気道を確保しながら、両手で顔を掴み、舌に吸い付く。

目を閉じたアレスの濃く長いまつげがふるふると震え、絶頂が近い身体と連動して眉がぎゅっと眉間へ寄る。

一方、散々アレスのケツマンコをとろかせたヴェクターのチンポも、みちみち♡と膨らんで今にもザーメンを吹き出しそうだ。

ぬ……ぶっ♡ ど……ちゅ♡ どちゅ♡ どちゅっ♡どちゅっどちゅっどちゅっ！♡ぱちゅ♡はちゅっ♡ばん……っ♡ばんばんばんばんっ♡

「じゅちゅ♡ はちゅ……う♡ んゝ♡っおゝ！おっ、かふっ♡うゝ♡ うん♡ ……ふはっ♡ っほおっ♡お♡おゝ♡お♡あん♡あ♡あ♡あゝ♡ っ♡」

「は……ふっ♡ん……ぢゅ♡ ふう、ふ——っ♡ふうゝ♡ ——っ♡ イく♡イくぞっ♡ アレス……っ♡ケツマンコにお代わりザーメン出してやるからな……っ♡」

互いを撫でまわしていた手を指を絡ませ強く繋ぎ合わせる。

甘え合い、温度を分け合う抽出が、射精欲によって自然と早くなる。頭がぼやけるような快感を引き延ばそうと腰の動きを緩めては、すぐに突き立てる速度が速くなり、抗ってはケツマンコを擦り上げる間隔は短く、早くなっていく。

「ヴェクタあ、ヴェクター、すき♡すきっ♡しゅき、すき、ちんぽ、ちんぽうれしい♡ちんぽすきっ♡ すきっ♡、イゝ♡いゝ♡んっ♡んんうふっ♡うゝ♡ っ！♡ ちゅ♡んちゅっ♡じゅう……♡ちゅうゝ♡」

「アレス、ぐ♡っ♡♡っん♡♡おおゝ……っふうゝ♡ っ♡ぐ、んおゝ お……っふう……ん♡ れりゅ……っ♡ぢゅ♡ぢゅうゝ♡ ……♡」

ばんばんばんばんばんっ♡ぱ……ちゅ♡ぢゅっ♡どぶっ♡ぶっちゅゝ♡びゅうゝ♡びゅぶウツ♡！どぶ……っ♡ごぶ……♡

受け止めきれなかった分のザーメンが、盛り上がった穴のフチからごぶっ♡ごぶ♡と吹き出す。太く一向に薄まらない濃厚なザーメンを擦り付け、マーキングするように重く打ち付けるたび、腹に挟まれ刺激を受け、ほぼ同じタイミングで射精したアレスのチンポも、打ち込まれるたびにザーメンをとろ……♡とろ……♡と漏らすように吹き出している。

射精のピークに達した瞬間に何度目かのディープキスをした二人は、射精後も口内を犯し合うのに夢中になっていた。

人並外れた肺活量を持つ男たちは、恋人の唾液で溺れそうになっても、しっかりと喉の中に押し込み、挿入したまま抱き合っている。

細やかに満足したのか、どちらからともなくどろお……♡と唾液の橋で唇を繋ぎ合わせ、ようやく口を離れた。

「ふうゝ♡ ——っ♡ ふ——っ♡ うゝ♡ ふう……——っ♡ ヴェクタ……ア♡ ヴェクター♡」

「ん……♡俺も好きだぜ、アレス、な、アレス……♡ よしよし……♡」

高い鼻を擦り合わせ、ベッドのきしむ音より小さく、お互いしか聞こえない声量で互いの名前を呼びあう。暖炉の火はほとんど消えかけていたが、狭い室内はむわ♡と二人の激しいセックスで熱気が立ち込めていた。

ヴェクターは下敷きにしていた大きな毛布を引っ張り出し、狭い一人用のベッドにすっぽりとアレスごと頭まで被ってしまう。二人分の大きな毛布の山は、しばらく内側からもぞもぞと押し合いへし合い突起が突き出し、時折密やかに甘やかし合う、くぐもった笑い声が響いた後……じゃれ合う動きは大人しくなり、小さな水音と、甘い声が代わりに部屋を包む。

窓の外は未だ暗く、しんしんと雪が降っている。確実に朝へ向かい出す世界で、男たちはもうしばらく毛布の中で二人だけの世界を楽しんだ——。

* * *

雪が振ったのは、真夜中の一瞬だった。

明朝には雪はぴたりと止み、代わりに透き通った冬の青空が、白い大地に色を与えている。午前時間帯になる頃、どうにか竜の素体を切り分けた男たちが台車を引いて村に帰ってきた。不眠不休で慣れない作業をした男たちは皆疲れ切っているが、その表情は誰もが明るい。すっかり素材になった竜のぶつ切りと共に帰還した男たちと、帰りを待っていた者たちの歓声が響いたと同時に、「赤い」アレスの活躍も全ての住人に知れ渡ることとなった。

問題の解決と、無血の帰還、竜の素材によって安泰を約束されたことによって、村は一気に活気づき、持てる限りの食材を持ちよりすっかり祭りの姿を要している。

活気や喧噪で村中総出で祭りの雰囲気包まれている中、冒険者「赤い」アレスとその仲間・ヴェクターが宿の階段を降りてきたのは、すっかり日が高くなったころだった。

玄関でパンの山を抱えていた恰幅の良い宿の店主は、武装した大男二人と鉢合わせた瞬間、ぎょっと目を丸くさせ、その場に立ち尽くす。

「……」

隣に並び立つヴェクターだけが、英雄が一瞬不安で身体を強張らせたことに気づいた。昨夜「セックスの音が住人にばれたら……」などと散々アレスを煽った張本人は、宿の店主へ向かってニコニコを通り越しニヤニヤと口角を上げている。

宿の店主はぽかんと呆けていたが、あぁっ！と声をあげると、二人へ近づき……、……毒気なくにっこりと笑いかけた。

「おはよう！やあやあ、驚いたよ！まさか村を救ってくれた英雄とそのお仲間さんがまだ祭りに参加していなかったなんて！かくいう私を含め、家内やこどもたちも、つい先ほど起きたばかりなんだが——」

「ああ店主さん、おはようさん。ご家族仲良さそうで幸いだ。おかげさまで、俺たちもよ～く眠れたよ。ベッドの質が良かったからかな？」

気さくなにいちゃんの役割を纏った舌が回る、回る。親切そうな店主は、社交辞令に目じりを更に下げ、頭を掻いて乗せられたまま話を続けた。

「うれしいこと言ってくれるねえ！あんたらが泊まってくれたことでうちの宿もいっそう箔がつく。アレスさん、本当にありがとう。あんたの名前は、こどもたちにもしっかり言い聞かせて、後世まで語り継ぐからね」

「……ああ」

アレスは一拍置いて小さく頷く。意図せず行く先々、様々な方法で「英雄」になってしまってきた男は、人々の口を完全に塞ぐことは出来ない、身に染みて理解しているからだ。ようは、各地で自身の名前が広がることに対して、完全に諦めている。

「……そうそう、感謝と言えばヴェクターさん！」

「はいはい、俺？」

「あんたが旅の話と一緒に分けてくれた乾燥野菜！おすすりめされた通りにスープにして家族で食べた

が、量もあるし甘みがあってもいかに栄養が含まれていそうで、本当にうまかったよ！ あんまりにもうまいもので、宿の客にも夜食にふるまったが、みんな大満足だったよ、ありがとうね」

うちの大陸の土は野菜作りに適さないからねえ、と、昨日食べた野菜の味を目を閉じて思い出そうとしている、寒冷大陸に産まれた、店主。
玄関で話し込む三人の背後から、あくびを噛み殺しながらぞろぞろと宿泊客たちが部屋から現れ、屋内からも響いてくる外の活気に何事かと驚いている。

……野菜？

今度は誰から見てもわかるように、アレスは怪訝そうに眉を潜め、整った顔を露骨に歪めた。
世界に対して表情の薄い「赤い」アレスにとって、ここまで表向きに表情を出すのは極めて稀なことである。
英雄の表情を見上げた店主がおやっと緊張で身を硬くしたが、アレスを隠すようにヴェクターが前にでると、ほっと胸をなでおろし力を抜いた。

「ぐ、ぐっすり眠れたのも、栄養が身体に回って睡眠の質が上がったからかな？ おかげさまで元気は出たし、そちらの英雄さんに竜も倒してもらって、村は栄えるし、宿に箔はつくし、感謝感謝さ！ 外に行ったら、あんたらはタダでなんでも飲み食いさせるって、村で決めてるから！」

楽しんで！そしてありがとう！

店主もまた祭りの運営に駆り出されているのか、抱えたパンの山を持って一足先に玄関を出た。
それに続いて、英雄へ賛辞を飛ばしながら、次々に宿泊客たちも恩恵に預かろうと急ぎ足で宿を出る。

彼らの後ろ姿を、手を振りへらへらとヴェクターは笑って見送ってみせた。
……より一層抜け落ちた表情で己を睨む英雄の分まで。

「トッパファに睡眠の質を高める効果は無い」

宿に自分たち以外の気配が無くなってから、すぐ。
大きくはないが、はっきりと聞き取りやすい低い声が、静かに仲間の男へ言い放った。

彼らの脳内に共通で通る「トッパファ」とは、彼らが旅した前的大陸で広く栽培されている、名産品の葉野菜である。

いつでも大量に栽培でき、栄養価が高く、腹持ちもいい。
さらに乾燥品が安く出回っているため、懐の厳しい冒険者にも人気の携帯食だ。
しかし、アレスが言う通り、あくまで栄養価が高いだけで、ただの野菜である。

食事で1回摂取しただけで、——大きな「音」に気付かないくらい——深い睡眠が、できる訳が、無い。

アレスはそこまでの理論をひっくりめ、普通の人間だと腰を抜かしてしまう程の重圧を籠め、短く問いただす。
ほぼ同じ背丈、体格、しかし格上の戦闘力を持った、帯刀の同業者に睨まれても、ヴェクターはどこ吹く風だ。

「さあ？おまじないでもかかってたのかねえ。でもさア、」

ぼり、と傷跡の付いた頬を掻き、口笛を吹くように言葉を返す。

アレスが視界にヴェクターの顔をしっかりと捉えた時、貼り付けた笑みを脱ぎ捨て、真剣な瞳がアレスを射抜いていた。
その真面目な顔つきに一瞬気を取られたアレスの肩を抱き寄せ、
眠る前までの名残を残した熱い吐息で形のいい耳をこそばせながら、低く囁く。

——とろとろに可愛くなったおまえは、俺だけのものだら……♡

歓声や笑い声に溢れた村に、バン。と短く、重い破裂音が響いた。

笑顔に溢れた村の広場では、ほとんどの村人が集い、命の危機が去ったことを喜びあっていた。

狭い村の中は、広場の中央に立てばほとんどの家屋が見渡すことができ、英雄が泊まる宿も視界に入れることができる。

喜びを切り裂くような異質な音に、村人たちは硬直し、惑いながら、誰一人逃げることも声を出すこともできず、音がした宿場を食い入るように見つめることしかできない。

何かこう、分厚く頑丈な物をとても強く、ありえないくらいの力で、殴ったか、蹴った、かのような…。

静まり返った中、宿の戸が開き、その中から平然と冒険者「赤い」アレスが現れる。人々の視線にも眉一つ動かさず、姿勢や視線はまっすぐに、マントを風にはためかせ、堂々とした立ち姿に、村人たちは気圧されるようにどよめいた。その後ろから、やあやあと頭を掻きながら、その仲間の冒険者がひょっこりと姿を現す。

村人たちは顔を見合わせて、ほうっと息を吐いた。
先ほど聴いた音は気のせいで、ようやく姿を表した親切で優しい救世主が、自分たちを脅かすことは決してない。
そうやってそれぞれの方法で認識を書き換えると、気を取り直し一同総出で英雄へ賛辞の声と食べ物を抱え詰めよっていった。

……英雄の後ろから現れた冒険者の尻から、もうもうと煙が立っていることには、気付かないふりをして。